

初年次学生の大学への適応の検討

「特別講義 人間関係とコミュニケーション」での実践より

Adaptation of the first year students through the reflection sheets from
Special Lecture: Communication and Relationship

小西 浩嗣
Hirotsugu Konishi

In this article, the adaptation of the first year students is examined from their reflection sheet at the Adventure Based Counseling. From the sheets, their changes from being nervous to adapt the new environment to being positive in terms of taking actions and thinking are evident. Although the limited kinds of evidences are available such as the reflection sheets and the observation by the facilitator, this could suggest that the effectiveness of the building the psychologically safe environment and relationship. To examine and judge the adaptation, other indexes, i.e., the retention rate and credits earning should be followed.

Keywords : First-year Experience, Adaptation, Comfort zone, Experiential learning, Adventure Based Counseling

1. はじめに

本稿は2018年度にはじまる「特別講義 人間関係とコミュニケーション」での実践の様子と授業を通し、不安を抱えた初年次学生の大学への適応について検討した成果の報告である。

初年次学生にとって大学という新しい環境に馴染めるか否かは大きな課題である。大学に入学したものの、高校までの学びのスタイルからの転換に戸惑ったり、新しい人間関係がつかれずに孤立してしまい退学を余儀なくされるケースも多々ある。

初年次学生に対しては、レポートの書き方やノートテイク、パソコンの使い方、文献検索やプレゼンテーションの技法といったスタディスキルと呼ばれる学習技術習得については必修科目として開講されている。しかし、対人関係への不安やコミュニケーション不全を抱えて入学してきた学生にとっては、その前段階での対応が必要と考えられる。

次節では、「特別講義 人間関係とコミュニケーション」開講経緯および実際の授業実践について触れ、第3節では、履修学生たちの振り返りレポートの記述から、本授業での体験がどのような変化を学生たちに及ぼすのかを整理する。第4節では本科目の初年次教育カリキュラムへの導入の可能性、展開について述べることにする。

2. 人間関係とコミュニケーションについて

2-1 授業概要

「人間関係とコミュニケーション」は、東生駒キャンパス所属学部の1年次生を対象に2018年度に開講された。この科目は大学という新しい環境への適応を自己理解・他者理解および、よりよい対人関係の取り方・かかわり方（コミュニケーションスキル）について学ぶことを目的とし、2005年度から心理福祉学部（現心理学部）で開講されている「心理学基礎演習」でのアドベンチャーカウンセリング（Adventure Based Counseling:以下ABC）を中心とした体験学習の手法を取り入れている。¹⁾

2018年度は文学部（前期）、法学部（後期）の各1クラスのみが開講であったが、2019年度には前後期各3学部（文学部、経済経営学部、法学部）3クラス、2020年度前期は新型コロナウイルス感染拡大により不開講となったが、後期は3学部4クラス（文学部のみ2クラス）、さらに2021年度前期3学部4クラスをそれぞれ開講した。

履修人数も年を追うごとに増えていったが、この科目が定員20人の予備登録科目であるため履修者は抽選で決定することになり、クラスによっては1.5～2倍以上の倍率になるケースもあった（表1）。

2-2 授業の実際

授業を通して、「他者と適切なコミュニケーション（バーバル/ノンバーバル）がとれるようになること」、「お互いを尊重し合いながら、クラスメンバーと協力し課題解決ができるようになること」を到達目標として設定。この「お互いの尊重」はABCを象徴する理念、グループ全員の存在と価値観を最大限に尊重しあう約束「フルバリューコントラクト（Full Value Contract）」と活動への挑戦が他者に強制されてではなく、自分の意志で決定する「チャレンジバイチョイス（Challenge By Choice）」を基盤としており、この理念にもとづいたABCや「人間のための創造的組織開発（Creative Organization Development: Creative O.D）」²⁾のアクティビティ、エクササイズ等を小体育館や講義教室、屋外（グラウンド）などを使って、前後期それぞれ15回実施した（授業終盤には学園前キャンパスのアドベンチャーカウンセリングコース/心理実習室にて2コマ続きで行った）。

実際には毎回の授業の中での学生たち個々の様子とグループの発達段階³⁾をアセスメントしながら適したアクティビティを実施、最初はレクリエーションやゲーム的な要素を取り入れて、他者とかかわる楽しさに気づき、徐々にグループでのコミュニケーションを重ねながら関係を深めていくことから次のステップへ、時には当初の計画を変更しながら進めていくこともあった（表2）。

表1 年度別履修者数

学部	区分	2018	2019	2020	2021
文学部	前期	17	21	—	39
	後期	—	14	33	10
経済経営学部	前期	—	20	—	20
	後期	—	22	12	18
法学部	前期	—	18	—	20
	後期	18	20	15	15

※定員は各クラス原則20人

※文学部2020年度後期および2021年度前期は2クラス開講の合計数

表 2 授業計画と実際の内容

回	テーマ	計画	実際
1	オリエンテーション 授業の目的・進め方を理解する	オリエンテーション、インパルス、肩たたき、ラインナップ(名前&リバース)、IDスイッチ(グッズVer.)	オリエンテーション、ペン回し、ラインナップ
2	アイスブレイク 出会いと緊張・不安解消の活動体験	WU・B:どっち向いてホイ、じゃんけんチャンピオン、サバイバルじゃんけん、Name:隣人の証言、出会い・発見・へえ～	ネームホイップ、じゃんけんチャンピオン、Have you ever?、サインあつめ
3	お互いもう少し近づいてみる、コンフォートの形成、トライ&エラー	もちつき、ウブンツカード、じゃんけんすごろく、ネームトスorジャグル&フィルミーイン(サラダポウル)、コミュニケーション系	インパルス、キャッチ、どっち向いてホイ、ウブンツ、ネームボールインパルス、ネームトス、フィルミーイン、サラダポウル、出会い・発見・WAOI&Sign UP!、解散式
4	多様性と相互理解、コミュニケーションを取りつつ楽しむ	もちつき、秘密のじゃんけん、ZipZap、右左私あなた、ミックス、Make2、ペアじゃんけん、(ペアタグ)、せーの拍手、木とリス	Good&New、もちつき、秘密のじゃんけん、右左私あなた+ZipZap、せーの拍手、木とリス
5	自己理解:あらためて自分を見つめる	自分さがしキャンパスウォッチング	キャンパスウォッチング
6	メンバー全員を相互に尊重する約束 Full Value Contract	Cゾーンアンケート、インパルス対戦型、聖徳太子ゲーム	ワムパム、世界の挨拶、カテゴリー(グルーピング)、グループジャグリング、ABCの説明とふりかえり(シート記載)
7	ABCとフルバリューの実践	グッズ送り、キツネとリス、サインあつめ、ジェスチャー	イエローピン・グリーンボン(ウサギとアクション仮面)、みんなオニ～スリーチャンスオニ、ペアタグ(～左右)～ダブルペアタグ、スターウォーズ
8	コミュニケーションスキル (バーバル/ノンバーバル)	Being(目標設定)、ストーリーラインナップ	錯視、流れ星、蜂の絵を描く
9		セブンイレブン、ストーリーラインナップ、Zoom ReZoom	エスパー、聖徳太子、Zoom ReZoom
10		聖徳太子、ポーキュパイン、ジェスチャー	番号!、ことばといっしょ、満員電車(イス取らせないゲーム)、ジェスチャー
11	協力と信頼関係の形成	コミュニケーション&トラスト:フープアクティビティ	インパルス対戦型、巨人・妖精・魔法使い(ゴジラ・ダチョウ・しむら)、大縄通り抜け
12	協働による課題解決	ペアじゃんけん、パイプライン	餃子じゃんけん、A面・B面、アンドロメダ、パイプライン
13	相互支援的なチャレンジ体験(グループでのチャレンジ/個人のチャレンジを他メンバーで支援)	ローエレメント、ビレイスクール	ネームホイップ、フィル・ミー・イン、お席どうぞ、Make2、エルポータグ ローエレメント:モホークウォーク
14		ハイエレメント	ハイエレメント:クライミング
15	ふりかえりとまとめ	ふりかえり課題発表、後期の自分へのメッセージ(絵葉書)	ふりかえり課題、カードチョイス(2か月半後の自分へのメッセージ)

3. 履修学生の適応について

本節では、本科目を履修した学生たちの授業各回の振り返りシートおよび期末振り返りレポートの記述をもとに、ABCを中心とする体験的手法を使った本授業が学生の大学への適応にどのような影響を及ぼしたのかについて整理する。

3-1 履修・受講の動機

まずは、本授業履修の動機についての記述をみってみる。対人関係への不安を抱えながらも、新しい出会いへの期待やコミュニケーションに対する苦手意識からの脱却にチャレンジする姿勢が示されている。

自分自身が人との付き合い方や関係性を築いたり、コミュニケーションをとるのが苦手だったので、この授業を受けて少しでも人との関わり合いや触れ合いが出来ればいいなと思いましたし、将来、社会に出たときに役立つといいなとワクワクして初回の授業が待ち遠しかったのが記憶に新しいです。

この授業を受けようと思ったきっかけが、基本的に喋ったことのない人と話すことが私は苦手であり、コミュニケーション能力を少しでも上げることが出来たらいいなという思いからでした。大学に入学して半年ぐらい経っているとは言え、顔は知っていても名前は知らず、喋ったことがない子がほとんどでした。そのため、どうしても仲が良い子と喋ってしまう傾向にあり、この授業の受講生と交流が出来るのか不安に思っていました。

最初は、人間関係とコミュニケーションという講義名からは講義の内容を連想できず、どんな授業なんだろう、という疑問はすごくあった。私は正直、人と話すことや何かをすることをあまり得意とせず、大勢のコミュニティは苦手な方だと思う。そんな私がこの講義を取ったのは、少しでも人と話したりコミュニケーションを取ることに苦手意識などを取り除けたらと思ったからだ。

3-2 授業を重ねる中での変化

授業が進む中で、当初感じていた新しい環境への「不安」「緊張」や対人関係への苦手意識が和らいでいき、個人とグループ（クラス）が変容していく様子が示されている。

最初の授業では、その時点ではまだ基礎演習が同じクラスの人を見つけられておらず「本当にコミュニケーションを学べるのだろうか」という不安があった。個人的に“共通点がない者同士の会話”が苦手な節があるので、最後まで授業に行けるのか不安だった。

3週目にもなると、そろそろ名前を覚えた人や、実は基礎演習が一緒だった人がいたことが判明したりと、着実にコミュニケーションが取れるようになってきた。もしかして僕、コミュニケーション向いてる？…（略）…後半の授業から、最初に掲げられた「Play Hard」「Play Fair」「Play Safe」「Have Fun」のモットーを再認識。ただ出された物事をこなすだけではなく、きちんとした目的を持って取り組むことを念頭に置いて授業を受けるよう心掛けた。心なしか再認識する前より楽しくなった気がする???…（略）…後半の授業は、みんなが慣れてきたことに沿ってか、序盤の授業より体を動かすものが多かった気がする（ジュスチャーゲームとか一定の数字を踏むゲームとか）。確かに、もうすでに名前も覚えてきたので、ぬいぐるみを回して自己紹介する必要もないか…

初回の授業前、ほぼ全員初対面で、自分から積極的に話せたわけではなかったが、なんとなく数人で固まって話すことができすぎて嬉しかったのを覚えている。しかし、その一方で、その輪の中にいなかった人は少し怖く感じて、このあとの授業を仲良くやっていけるかすごく不安だった。…(略) …二回目の授業からは、小体育館でこの授業のメンバーと顔を合わせると、安心感があった。だが、この時点ではまだ自分から積極的に行動・発言することはできなかった。「こうしたほうがいいんじゃないか」と思っている、それを口に出すことはできずに、誰かが発言するのをただ待っているだけだったが、授業も後半になり、みんなとの仲も深まっていくころには、だんだんと自分の意見が言えるようになっていった。自分の提案に賛同が得られると、すごくほっとしたし嬉しかった。

コミュニケーションはとても苦手、高校でもクラスメイトでも話したことがない人がいるほどであったから、受講の際は、とても不安だった。しかし、授業の回数を重ねることで周りの人の雰囲気や把握し、最適なコミュニケーションをとれるようになってきたため、受講への気が楽になった。人の顔を見ることをできるだけ避けたいと思っており、視線が合ったらすぐ逸らしてしまっていたが、活動を通して、相手の視線の動きに注目することでコミュニケーションがスムーズになることを学び、会話をしている間だけでも意識して目を合わせられるようになった。周りの様子を気にして、自分にできることを積極的に出来るようになったと思う。

2020年度(後期)はオンラインを基本に、中盤と終盤にそれぞれ2時限続きの対面授業を行う形での開講であった。次の文章ではオンライン(Zoom)においても、その特性を活かした体験的なアクティビティの提供によりクラスメンバー同士の関係が徐々に深められていく様子と対面授業ならではの発見、気づきが示されている。

後期になり、基礎演習だけは対面になりましたがそれだけでは友達を多くは作れません。しかし、この特殊講義を受けているお陰で対面ではなくとも同じ学校の仲間と話すことが出来ますし、直接話はしなくても、あ、あのと同じ特殊講義の人だ、と見かけて見覚えあるな、となるタイミングがものすごく増えました。これからは見覚えのあるな、から自分から話しかけられるほどにこれからの授業を通して仲良くなれたらなと思っています。そういった意味で自分はこの特殊講義の授業は毎回緊張はしていますがワクワクし、毎週を楽しみにしています。

この授業ではzoomを用いて行っていた。対面ではないzoomという形式で、初めの方はあまり慣れていなかった。私は、人見知りというのもあり、この授業で上手くみんなと話せるのか少し心配していたのだ。一度も会ったことも話したこともない人たちばかりで、少し緊張していたのもあり、初めの方の授業はぎこちなくみんなと話していた。しかし、みんなと少しずつ話していくうちにその緊張も溶けていった。

対面授業で気づいたことなのですが、対面までは会話するだけならリモートだけでもそこまで変わらないだろうし、いいんじゃないのかと思っていました。しかし、実際に会ってみると画面越しに会うのとまた違う感じがしたので少し驚きました。長い時間同じ空間にいるから話す量や間合い、気分の上下などなど、なかなかリモートじゃ分かりにくい情報も分かったので新鮮でした。…(略) …また、みんなで何か一つのことをすると会話が弾みやすいのかなと感じました。これは初回の授業の事なのですが、私は普段初対面の人との会話が全くと言っていいほど弾みません。しかし、話題が用意されているからか、いつもより話しやすい印象を覚えました。

3-3 期末振り返りレポートより

授業全回を終えての振り返りからは、受講前と受講後の感情面・行動面の変化やメンバー同士の関係性が深まった様子が述べられている。

この授業で出会ったみんなとの関係性は、友人というよりも仲間という言葉の関係性に近かったように感じられた。この仲間という関係性は社会では職場の同僚といった関係性と同じだと思う。コミュニケーションが社会でもどこでも大切であるということは、これまでも知っているつもりだったが、この授業を通じてただ言葉を交わすことだけがコミュニケーションではなく感情や考えを言葉以外にも色々な手段を用いて信用や信頼を築いていくことがコミュニケーションというものなのかもしれないと知った。

この授業を受けて、男女問わずコミュニケーションを取りやすくなった。初めは周囲が知らない子だらけばかりで不安を感じていた。しかし、授業を経て、まじめに楽しく、じっくりと自分自身を振り返ったり、コミュニケーションをとったりするうちに自然と打ち解けて、信頼関係や団結力を培うことができた。このことは、自分にとってすごく良い経験であり、これからの大学生活で役立てられるようなことを得られたのではと思った。また、自分自身を改めて見直す機会になり今まで気づけなかったことや、新たな変化について知ることができたため良かったと思った。

学園前キャンパスでのアクティビティではみんなが協力、声かけをし、みんなで一つの目標を達成することができた。このような協力、声かけも4月当初の入学したての頃ではありえなかっただろうと思った。クライミングではこれまでの授業で積み上げてきたお互いの関係を試される授業の集大成ともいえる活動だったと思う。壁を登る人は命綱を握る人を信頼し、命綱を握る人は直接命綱を管理する人だけではなく、余った綱をまく人みんなが集中力を切らさず自分の役割に責任を持ち登る人の応援をするこういった状況にこの授業の意義というものが感じられた。

以前から親しかった人とさらに深く理解し合え、また今まで話す機会のなかった人と交流するきっかけにもなりとても有意義な時間を過ごすことができた。最終講義では、今までの総決算としてクライミングを行った。人が登っている際には数人がかりでそれを支えることで、大きな団結力が生まれていると感じた。私は半分までは登りきるという目標を定めて挑み、ちょうど半分を超えたあたりで断念する結果となった。目標達成による充足感があったが、暫くすると自分ならもっとできたのではないかと考えるようになった。目標にはたどり着けてももっと高みを目指したいと思える、そんな自分を少しだけ好きになれた。

初めて授業を受けた日私は衝撃を受けました。なぜなら、座学だと思っていたのにも関わらず体験型だったからです。今思えば体験型だったことで、同じ授業を受ける殆どの人と仲良くなるきっかけに繋がっていたので良かったです。…(略)… 私が一度も休まずに授業に参加できたのは、自分のチカラだけでなく同じく授業を受ける仲間が協力してくれていたからだと思います。これは物理的にはありません。何が言いたいかというと、人間関係は環境にも左右されるということです。それぞれが親切に、楽しむ、という気持ちがあり雰囲気良かったことが次も参加したいという意欲に繋がりました。…(略)… 学園前で先輩方と一緒に授業を受けた時は、堂々と話している姿がかっこいいと思いました。そして、怖いという気持ちがあっても挑戦していた仲間の終わった後の顔が忘れられません。そこには得られた経験と達成感があったからです。

もともと人見知り気質の自分が他者とのコミュニケーションを図るのは苦手で、はっきり言って全く気分が乗らなかった。コミュニケーションと聞いてマイナスのイメージしかもっていなかったから不安でいっぱいだったが、いざ受けてみると自分が想像していた授業形式ではなく度肝を抜いた。普通に授業ではなくまるで遊びのように感じた自分は内心安心したのを今でも覚えている。…(略)… アドベンチャー流のゲームが突飛だったとも思い、今までそんなものをしたあるいはしている人を見たこともなかった。例えば、一般的なじゃんけんとはだいぶ異なったアドベンチャー流のじゃんけんは、体を使ったものであり初めてみたときは爆笑していた。…(略)… 自分から声を掛けて行動していたことが度重なってこの授業では行動している自分に驚きが隠せなかったけど、明らかに受ける前の自分とは成長しているように捉えられる。

毎回この授業を楽しみにして、授業の時間が過ぎるのもあつという間だった。毎度、授業時間がもっとあればいいのに、と思っていたほどなので、前期が終わってしまってすごく寂しい。この授業のメンバーと話す機会も減ってしまうのではないかと考えると、不安さえ感じてしまう。初回の授業のときはみんなと仲良くなれるかが不安だったのに、今となっては真反対の感情を抱いている。四か月間で、しかも授業は週一回だけだったのに、ここまで自分の心持ちが変わるのは予想外だった。

私が一番感じた変化は、自分の感情を素直に表すことが出来るようになったということだ。私は幼い頃からずっと人見知りだったことからか、人にすぐ心を開くことができないというか、疑心暗鬼になってしまうところがあった。でも今回この授業で週に一回必ずクラスメートと一緒に行動したり、コミュニケーションをとることによって少し感情がほぐれたと言うか、言葉に表しにくいのだが、何か自分の中の壁を乗り越えることができたように思えた。…(略)… 正直初回の授業を受けた時は内心ドキドキだった。「受講登録したはいいものの本当に最後まで出席できるのか、途中で諦めてしまいそうだな」「嫌な態度、表情をしていないか。ちゃんと普通にみんなと同じようにできているのだろうか」など心配事もたくさんあった。しかし実際受けてみると心配事よりも楽しさが勝ち、しまいには木曜日が心待ちになるくらいだった。

3-4 成果と課題

履修・受講動機でも述べられてる通り、コミュニケーションが苦手と思われる学生が多く、授業の序盤(初回～第4回頃)では「他者とかかわりをもたない、話さない」、「声が小さい」といった状況であったが、受講を「人見知りの克服」「もっと人とのコミュニケーションを豊かにしたい」「友人の輪を広げていきたい」「コミュ障解消」などの機会として前向きにとらえていることもあり、学生同士がお互いのことを知り、全員が安心して受講できる場所が形成されていくことにより、学生個々の表情が豊かになり、相互に話す、かかわりあう場面が増えていった。学生自身のふりかえりの言葉のみならず、終盤(第10回～12回)の授業を見学した教員にも「学生たちの表情に安心感が見えました」、「失敗を一切責めずにお互いを受け入れている関係が看取できました」と映っている。

最も重視したのが学生・教員にとって、安心・安全な「場」をつくるということである。ここでいう「場」とは、「コンフォートゾーン (Comfort zone)」⁴⁾ のことであり、まずは心理・感情面に焦点を当てて、誰もが初めての場所(ここでいう大学初年次)で感じる「不安」や「緊張」などを「遊び」「レクリエーション」の要素を以って取り除くことにより、徐々に態度・行動面や認知・思考面でのポジティブな変化、すなわち授業・クラスへの適応がされていったと考えられる。

ただし、振り返りレポートの記述や教員の主観といった限定された視点だけで、適応したとは断言できないが、少なくとも感情面での安心・安定が学生たちの関係性を構築する基礎となり、大学での

「学び」に向かうための意識と態度が徐々に形成されるきっかけになったのは確かである。適応したかどうかを検証するためには、以降の大学への定着率（在学 / 退学）や他授業への出席、単位取得などの数値的な追跡調査も必要とされる。

4. おわりに

「人間関係とコミュニケーション」は正式な初年次教育カリキュラム科目として位置づけられてはいない、また選択科目であるために初年次学生全員が履修するのではない。しかしながら、初年次学生の大学への適応や高校までの受動的な学びから能動的な学びへの転換が課題となっている中で、初期段階における安心できる場の形成と人間関係の構築に ABC をはじめとする体験的な手法の導入は有効であると考えられる。

他学では大幅にカリキュラムの改訂を行い、初年次教育科目に独自の体験的手法を取り入れ半期15回を通して開講している例もあるが⁵⁾、本学での既存のカリキュラムや初年次教育科目に組み入れることは可能であり、すでに活用実践の報告もある。⁶⁾

実際の導入に際しては課題も多くあるが、初年次学生が入学後早い段階で大学に自分の居場所を見つけれられるかどうかは、その後の大学生活への適応と専門教育への学びの移行の鍵と言える。そのためにも初年次教育のシステムや制度的な面での整備と並行して、本稿での効果検討内容をさらに深め、学生の受講前後における変化過程に ABC など体験的手法が及ぼす影響についての詳細な検証、加えて前節で触れた通り、数値的な分析も今後の課題と考えられる。

註

- 1) ABC 全般の歴史的背景、理論・手法、本学心理学部における授業展開については、川合・小西（2009）を参照されたい。
- 2) Creative O.D は、アメリカ発祥の「ラボラトリー体験学習」をもとに株式会社プレスタイムがその普及を目的に開発した人材育成のプログラム。ラボラトリー体験学習は、“気づき”の学習ともいわれ、産業界のみならず学校教育にも取り入れられ、現在実施されているグループワークやアクティブラーニングへとつながっている。
- 3) グループの発達段階は、心理学者のブルース・タックマン Bruce W. Tuckman が提唱した、「Froming（形成）」「Storming（対立）」「Norming（規範形成）」「Performing（実行）」「Transforming（変化）」の5段階の発展順序をいう。ABC ではグループの発達段階をアセスメントして、相応しいアクティビティを使ってファシリテートを行う。
- 4) コンフォートゾーン Comfort zone は、ストレスが無く、快適と感じる精神状態、場所を指す。アドベンチャー教育ではコンフォートゾーンから踏み出すことによって成長を促している（コンフォートゾーン突破）。本授業では、まずはこの場が学生たちにとってのコンフォートゾーンになることを目指した。
- 5) 関西大学人間健康学部は初年次教育科目（スタディスキルゼミ）においてアドベンチャー教育の手法をもとに独自で開発した「関大型体験学習プログラム」を導入、8名ないし9名の教員が1クラス約20名の学生を担当し、半期15回を通して開講している。
- 6) 河口・小西（2021）、小西（2021）がこれまでの取り組みを紹介しているので参照されたい。

参考文献

- School, J. & Maizell, R.S. (2000) : Exploring Islands of Healing, Project Adventure, Inc. MA (プロジェクトアドベンチャー ジャパン 訳 2017 : グループの中に癒しと成長の場をつくる : 葛藤を抱える青少年のためのアドベンチャーベースドカウンセリング)
- 川合悟・小西浩嗣 (2009) 「アドベンチャーカウンセリングの実践」 蓮花一己・三木善彦編『こころのケアとサポートの教育—大学と地域の協同』 帝塚山大学出版会、pp.45～72
- 河口充勇, 小西浩嗣 (2021) : アドベンチャーカウンセリングの活用実践—帝塚山大学文学部での取り組みに関する予備的報告—「人間環境科学」 帝塚山大学人間環境科学研究所 第28巻 pp.3-20

- 小西浩嗣 (2021) : 授業カリキュラムにおけるアドベンチャーカウンセリングの実践—導入からこれまでの取り組みについての報告—「人間環境科学」帝塚山大学人間環境科学研究所第 28 巻 pp.21-32
- 小室弘毅 (2020) : 「教養」から見る初年次教育とアクティブ・ラーニング 関西大学高等教育研究 第 11 号 pp.9-20
- 灘英世, 櫻木規美子, 村川 治彦 (2019) : 初年次教育が社会人基礎力に与える影響に関する研究「身体運動文化論攷」第 18 号 pp.101-117
- 村川治彦, 杉本厚夫, 三浦敏弘, 涌井忠昭, 小室弘毅, 灘英世, 安田忠典, 中川昌幸, 小野善生, 宮川治樹 (2018) : 実践知から生き方の探求へ—関大型体験学習プログラム (K-ELP) の構築—「身体運動文化論攷」第 17 号 pp.1-18